

伊丹敬之著、加護野忠男著「ゼミナール経営学入門」日本経済出版社 1993年9月24日刊を読む

ゼミナール経営学入門

1. 日本の企業経営の現実を説明することができるような生きた経営学 - 生きている経営学 - とは、

- (1) 現実の経営の実感を感じることができるような内容
- (2) 動いている、変化している、発展しているという経営の動態を説明できる内容

2. 経営とは何か

- (1) 環境のマネジメント (組織の環境をマネジメントすること)
- (2) 組織のマネジメント (組織の内部の人間集団をマネジメントすること)
- (3) 矛盾と発展のマネジメント (あちら立てれば、こちら立たず、矛盾こそが発展のエネルギーの源泉)

3. 経営学とは何か

- (1) 人間は一人では大きな仕事はできない。そのために組織というものが生まれる。
- (2) その組織の運営はどんな原理や原則にもとづいて行われているのか。どんな原理で運営されたときに、組織が効率的なものとなり、社会的に有益なものになりやすいのかを研究するもの。

4. 経営学の基本的目的

- (1) 経営現象理解のための枠組み、概念、理論の提供
 - ・ 企業経営の理解の知的な面白さ
- (2) 有効な経営行動の提示とそれがなぜ有効かの論理の提供
 - 現場の「経営のあるべき姿」への示唆
 - 良い経営と悪い経営の識別の基準
 - 共感をもって自分の経験を整理
 - 自分のなすべきことへの示唆がその論拠とともに得られる

5. 経営学の特長

- (1) 経営学は不断に変化し進化している
- (2) 経営の現実も不断に変化している
 - 経営の課題、重点、問題解決の方向は変化し続ける
 - 変化に伴い新しい概念や理論を必要とする
- (3) 経営とはいかにチャレンジングな仕事か感じてもらいたい
 - 経営学とは実に興味をそそられる学問

経営はやりがいのある仕事。だから多くの偉大な人々が企業の経営に懸命になる。単純な権力欲や金銭欲で説明できるものではない。

(4)その経営を理解しようという経営学という学問も底の深い、しかもダイナミックに変化する興味津々たる学問。

[コメント]

日本人の手になる経営学の標準的なテキストの1つ。テキスト、教科書ではあるが、経営学の教科書はこの本に限らず人間味にあふれよく読むと実に面白い。よく考えれば、経営学だけでなく、教科書はすべてよく読むと実に面白い。興味のないものかもしれない。そうでなければ教科書ではないのかも知れない。

- 2009年9月26日 林明夫記 -